Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-11-25

# 山口誓子と浅井啼魚

米田，恵子

(Citation)
日本文化論年報,24:21-34

(Issue Date)
2021-03

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81012671

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81012671

# 山口誓子と浅井啼魚

米田恵子

## はじめに

山口誓子の妻波津女の父である浅井啼魚については、「浅井啼魚　人と作品」（「俳句史研究」第二〇号、大阪俳句史研究会）に詳しく述べたが、誓子が浅井啼魚について書いている随筆があることが、最近分かった。それは、「死の随筆」（「文藝」昭和一二年一一月号）である。『山口誓子全集　第九巻』にも収載されていたもので、不覚にも、前稿では見逃していた随筆であった。そこで、本稿では、次の二点について考察する。一点目は、浅井啼魚が亡くなり、四十九日も明けやらない時に書かれたこの随筆についてである。二点目は、前稿で指摘した、誓子が昭和一六年八月に遺句集として編集した『啼魚句集』において「ホトトギス」の高濱虚子の雑詠選に入選した句を必ずしも入集させていない点についてである。浅井啼魚は「ホトトギス」同人でもあったにも関わらずである。この編集の時期は、誓子が昭和一〇年五月に「ホトトギス」を辞め「馬酔木」に入り、「ホトトギス」とは違う独自の新しい俳句を求めていた時期に重なり、『啼魚句集』を詳細に見ることによって、誓子がどのような俳句を良しと認め、あるいは認めなかったのかという実際の選句のようすが少しでも分かるのではないかと考えるからである。

## 1．啼魚の死――「死の随筆」をもとに

「文藝」昭和一二年一一月号に発表された「死の随筆」（注1）は、題名からして、誰の死、まさか誓子ではないし、どういうことかと驚かされる題名である。しかし、「昭和一二、一〇、一、於幸相山」と最後に記されてあることや内容から、山口誓子の妻波津女の父、誓子から見ると義父にあたる浅井啼魚の死であることが分かる。この随筆は、その浅井啼魚の突然の死による家族の悲しみ、狼狽、弔問客や周りの人の反応、葬儀のようす、さらに、火葬および骨揚げまでを、非常に冷静に客観的に描写する随筆なのである。

浅井啼魚は、昭和一二年八月一九日、朝は元気に神戸の

海損事務所へ出勤し、そこで、突然狭心症のため亡くなったのである。六三歳であった。義理の父であるが、誓子にとっては実の父に近い存在であった。それは、京都に生まれた誓子は、二歳の時に、実父が大阪の会社へ行くことになり、祖父母のもとに引き取られ、その後母は自殺し、妹たちとも離れて暮らさざるを得なくなり、家族の縁が薄かった。そんな誓子にとって、浅井家の家族は、血のつながった実の家族以上の存在であったと考えられる。母の自殺の理由は、父が家を顧みなかったためくらいしか、誓子は明かしていないので、父と母の仲はあまりうまくいっていなかったと推測するほかはない。このように、実父との縁も薄かったため、浅井の父は、誓子にとっては実の父と同じ存在だったと言える。ましてや、住友の社員ということも当然であるが、俳人としての誓子を高く評価し、波津女との結婚を進めたのは、この時代では父の浅井啼魚であり、芸術をも理解する啼魚を誓子が慕うのは当然と言えよう。その啼魚が亡くなった時、誓子は句集『炎晝』に、「海岸通」と題した連作俳句を載せる。

海岸通

神戸Ｏ・Ｓ・Ｋビル内にＡ・Ｉ海損清算事務所あり

喪の服に手帊(しゅはく)挿しはさみあさ暑し
熱風に喪服の短衣(チョッキ)脱ぐことなし
事務机遺(のこ)れり灼けて港埠あり
灼くる日の艤装朱船を見て泪(なみだ)す
喪服われ紅き軽羅と遭はむとする

という五句である。「海岸通」は、大阪海上火災を辞めた浅井啼魚が開いた海損清算事務所があった神戸の地名である。連作の内容は、葬儀の模様である。「熱風」「灼くる日」から暑い夏の日の葬儀ということが分かり、喪服の我と普通の人たちの軽装を対比させる。冷静に、義父の死を受入れていることは分かるが、ただ、人前では涙をみせることはなかったと思われる誓子であろうが、神戸の港に停泊する船を見て「泪す」と詠む。このような、啼魚を悼む句を作っている誓子であり、同じように啼魚の死についての随筆を発表するのは当然のことであろう。それだけ、誓子にとっても、もちろん家族にとっても、啼魚の死は、突然であり、受け入れがたかったにちがいない。しかし、「死の

随筆」は冷静に客観的に、箴言で綴られる。

客の少い二等車――死に馳せつける遺族はこの車を選ぶがよい。

＊

死體――ながい晝寢

＊

心臟は日頃醫者の堅く堅く保証するところであつた。死因は狹心症。

＊

嗚咽流涕――この権利をこゝろゆくばかり行使する。

＊

濡場――この言葉は「死者のあつた家」のことをも意味せしめるといゝ。

（略）

遺族の繰語は「若し・・・しなかつたら」といふ假定法で語られる。

若しその日ロータリー倶楽部に出席しなかつたら。

若しその日冷房映畫館でニュース映畫を看なかつたら。

まず、啼魚の急死を聞いて、遺体と対面しての遺族の悲しみを表現する。しかし、その描写は「死體」は「長い晝寢」であり、「嗚咽流涕」は遺族の権利であり、あまりに涙するものだから「濡場」という言わば不謹慎な表現も使う。「濡場」は、本来の意味は男女の情時の場面である。さらに、遺族は「若し…しなかつたら」という「假定法」で、父の死を悔やむ。そこから、随筆は、葬儀の当日になる。

告別式場に於ける無数の供花――一日の花。

大阪海上保険の社長まで務めた人であるから、葬儀は盛大に行われたであろう。しかし、葬儀の花は一日だけの花であり、そして、「死」についての考察が始まる。

記憶といふものに細部の描写がない。

＊

寫眞といふものが出来てよりこのかた、死者に對する哀傷の念は実に深くなつた。

＊

死――これ以上のニュースはない。

その日からラヂオは消したまゝである。

日頃、流れているラジオのことまで書かれ、視覚だけでなく、聴覚でとらえようとする誓子の観察力がうかがえる。次に生きている者と死んだ者との対比である。

遺族は會葬者を見ながら、「この澤山のひとが生きているといふことは不思議なことだ」と思つてゐる。

＊

現に生きてゐるひとよりも、既に死んでゐるひとの方が數に於て比較にならぬほど多い――普段はそんなことを考へて見たこともない。

確かに、亡くなった人は一人であるが、周りにはたくさんの生きている人がいるというそんなことは身近な人が亡くなったときぐらいしか考えない。しかし、少し冷静に考えれば、生きている人より死んだ人の方がはるかに多いのであるが、普通はそのようなことは考えないものだ。矛盾することを誓子は鋭くつく。同じように、死者と残された者について、フロオベエルの詩の一節の「死者は生きてゐる人々の四分の三より愉快である」と岡山巌の短歌「悲しみの最なかにありて生きのこる人らはときに笑ひ合ひにき」を対比させる。死者の方が愉快・幸せととるのと、生き残った人々も悲しみの合間に、笑い合うこともあるという死者と生者の間に存在する矛盾を述べる。

次に、会葬者に、誓子の住友の上司であり、歌人でもある川田順をみつける。

川田順氏は告別式にも来て下すつた。そのとき弔歌を捧げて下すつた。

川田氏は、諸腕で胸を挟み、上體とその頭部を心持前へ屈めて歩かれる。遺族席で立禮をしてゐる私の前を通られたときは、いつもの足どりであつた。ところが、いつもとちがふのは氏の顔貌であつた。この日のやうな、こわばつた、緊張された顔を、私はつひぞ見たことはない。さういふきびしい顔は、氏の部下として、私は會社でも見たことはなかつた。私は一瞬、非常に厳粛な氣持ちに撃たれたのであつた。

川田順も、会社人と歌人の二足の草鞋をはき、同じように俳人でもある誓子に目をかけていた上司である。この時期の誓子の句帖を見ると、川田順の会社などで見かける一挙手一頭足を書いたメモが多く残されている。また、後年、誓子は「三人の父」の一人に川田順を挙げているように（注2）、義父である浅井啼魚を亡くした今は、父と呼ぶに値する人は、川田順である。その川田順の悲しみを誓子は見た。

次に、誓子は、柩にトランプを入れたことと浅井啼魚の蒐集について述べる。

> 柩には封をきらないトラムプを入れた。故人の愛玩したものだからといつて、矢立だの、水滴、陶器などを入れる譯にはいかなかつたから。
>
> 骨揚げのときに、鐵板の上にはすこしばかりの遺骨と恰度入れて置いた位置にトラムプの部厚い札が、一枚一枚白く燒けのこつてゐた。一切はそれだけであつた。私は、まだほとぼりの冷めないそのトラムプの燒殻を指のさきでいぢくらずにはゐられなかつた。

誓子は柩にトランプを入れたのである。しかも、その焼け殻を指の先でいじくったという。故人に少しでも触れたいという気持であったのだろうか。トランプというのは、次章でもふれるが、浅井啼魚が遺した「火燵たぬし親子が中の賭事も」という俳句に関係していると考えられる。「賭事」は、トランプ遊びのことであろうと推測する。家族が炬燵を囲んで、みんなでトランプ遊びをしたのであろう。それが頭にあったから、誓子は、高価な矢立や、燃えない水滴や陶器は柩には入れられないため、トランプを入れたのであろうと思われる。

さらに、その矢立や水滴や陶器の蒐集について、誓子は次のように述べる。

> 故人は俳句をつくつてゐた。その関係から、古俳諧の短冊を随分蒐集してゐた。
>
> そのほかに、書畫、矢立、油壺、水滴、陶器等の蒐集は實に夥しい。矢立のいゝものだけでも五百本以上あつて、それがいくつかの筥に分類され、整理されてゐる。私はその筥を見ながら、これはボストン博物館

行だなどと戯談を云つた。

遺された子供達の間には、故人の蒐集物を全部處分すべしとする説と、處分すべからずとする説とが別れてゐる。全部處分すべしといふ説は、思ひ出の種を遠ざけようとする一時の感情論だ。私は勿論後の説で、この蒐集の為に費やされた個人の努力と、その努力のうちに故人が味つたよろこびとを、いつまでもこの蒐集物のかたちに於て保存したいのである。

私も、ひょつとすると、陶器の本などを讀みはじめるかも知れない。

啼魚は、俳句のほかに矢立てや水滴・陶器を集めていた。故人を思い出すため処分したほうがいいという意見といつまでも故人の気持ちを、その思い出とともに大事にしたいため、処分してはいけないという意見に分かれたが、誓子は、遺しておくべきで、故人が味わった喜びも保存したいという気持ちである。さらに、自分も陶器に興味をもつようになるかもしれない、と述べる。しかし、この後、すぐに次のように書く。

蒐集物――あつまつた瞬間に、よろこびは失せてしまふものである。

少々残酷な表現である。手に入れるまでの努力や苦労・期待と喜び、しかし、手に入れた瞬間、喜びは失せてしまうという。これは、ある意味、当たっているのかもしれないが、蒐集という趣味の残酷な真実と言える。

このように、啼魚の死に際しての随筆であるが、誓子は悲しみとともに非常に辛らつに死を描くのである。そして、最後に次のような言葉で結ぶ。

死のやすらかさ――生きてゐるものは疲れてゐる。

確かに、大切な人を亡くして悲しいが、遺族は一連の葬儀の段取りや法要、参列者への応対などの儀式で疲れ果てる。これも、事実である。

では、なぜ、誓子はこのような随筆を書いたのだろうか。妻の波津女は、実父を亡くしたのであるから、悲しみにくれ、「馬酔木」の昭和一二年一一月号・一二月号・昭和一三年一月号・二月号の四号に渡って、父を悼む句を載

せている。まさに、その悲しみは計り知れないものであったことは容易に推測できる。一方の誓子は、もちろん、啼魚を失った悲しみは同じように分かるのであるが、故人をそのままに「死体」と言い、また、長い「昼寝」と表現したり、「嗚咽流涕――この権利をこゝろゆくばかり行使する」は皮肉ともとれる表現をしたり、「濡場」は、本来男女の情事をいう言葉であるが、悲しみのため涙で泣き濡れているようすを表現する。少し、不謹慎ではないかとさえ思うのであるが、周りがあまりにも悲しみに沈んでいるため、あえて誓子は、こういう本音のようなものを書いたのであろうか。頼りにする啼魚が亡くなったため、波津女の夫として恥ずかしくないように、敢えて冷静さを装ったのであろうか。

その理由を探るための一助として、誓子の句帖を見ると、先に引用した箴言のような文の一部は、『誓子句稿　第六十一輯』の九月六日の項に現れ、その後、この句帖のところどころに「死の随筆」に載っているのと同じ文が書かれているのである。九月の段階で、誓子は啼魚の死に関した随筆を書こうと思っていたようである。しかし、なぜ、このような冷静な、客観的な、辛辣ともとれるような表現をしたかについては、何も書かれていなかった。ただ、同じ句帖の早い頁には、「百ヶ日がまゐりました」と始まる下書きの文も書かれている。それは、家庭での父啼魚ではなく、広く会社や社会で活躍する姿をまとめた「追悼録」を編集したいというので、生前お世話になった人々に対して送られたと思われる依頼状の草稿である。これは、生前の啼魚の姿を残したいという率直な気持ちから出たものであろう。その気持ちを実らせたのが、昭和一六年一〇月四日に出版された『父の記録』である。そして、この『父の記録』の出版の前の八月一九日（命日）に刊行されたのが、『啼魚句集』である。この句集については、次章でふれるが、『誓子句稿　第六十輯』の八月二〇日夜、つまり啼魚のお通夜に川田順が訪れたときに言った言葉が記されている。

山口君の為すべき親孝行は啼魚句集を上梓することだ

この言葉の通りに、四年の月日がかかったが、誓子は『啼魚句集』を上梓したのであった。

## 2. 誓子の選句――『啼魚句集』を編む

山口誓子は、昭和一六年八月一九日の命日に、義父浅井啼魚の遺句集である『啼魚句集』を出版したのであるが、そこで気になったのが、誓子は、虚子選の「ホトトギス」の雑詠に入選した句を必ずしも句集に入れていないことである。実際に、どんな選であったのかは、非常に興味深いところであった。

そこで、まず、「ホトトギス」に入選した啼魚の句を抽出し、虚子が選んでいたにも関わらず、誓子は、どんな句を選び、また採らなかったかを見た。結果を先に述べると、高濱虚子が雑詠に啼魚の句を選んだのは、九一句で、そのうち誓子が『啼魚句集』に選んだのは五六句であった。調べる前の予想では、二・三割ぐらいかと思っていたが、半数以上の六〇％であった。誓子は「よろづ鑑識眼の高かつた父の句集に寛選はよろしくないと考へた」と『啼魚句集』の「序」とも言える「父と俳句」において述べているので、さぞかし厳選だったのではないかと推測したからである。それが予想に反して、意外と多かったのである。やはり、いい俳句は誰が見てもいい俳句ということなのであろうか。これが結論かもしれないが、本章では、誓子の選句の一端を知るためにも、虚子が選んでいた俳句の中で、どんな俳句を句集に入れ、採らなかったかを具体的に見ていく。

大正一一年から俳句を始めた啼魚の「ホトトギス」初入選句は、管見の限りでは大正一二年三月号に載った句であり、次の句である。

秋風に親に離れて四十年

（ホトトギス」大正一二年三月号初入選）

当時のことであるから、啼魚も、赤飯を炊いて喜んだにちがいない。啼魚はこのとき四八歳であり、八歳の時に相次いで両親を亡くしているので、ちょうど四十年を経て、亡き両親を詠んだ俳句であることは明白であるが、なんと誓子は、初入選の句を句集に入れていないのである。この「秋風」に代わると言ってもいい句として、次の句を誓子は選んでいる。

父の忌の八月五日極暑かな（大正一一年成）

啼魚の両親が時を経ずして亡くなっていることを知っている人には、「秋風に親に離れて」は納得できるが、それを知らない多くの読者には、「離れて」という語から、何か事情があって、つまりこの時代には養子に出されることはよくあることだろうから、両親と一緒に暮らせなかったのだろうなあという解釈も成り立つ。高濱虚子の選も、そういう解釈により、入選させたのではないかと思われる。しかし、事実は、両親が相次いで亡くなっているのだから、これでは、曖昧になるため、誓子は「父の忌」の句の方を入れたと考えられる。啼魚の父も八月五日という暑い日に亡くなったが、啼魚も八月一九日という残暑厳しい日に亡くなっている。実の父といってもいい存在であった啼魚の死と重ね合わせて、栄えある「ホトトギス」雑詠初入選の句を外して、「父の忌の八月五日酷暑かな」の方を入れたと思われる。

同じように、「母の忌」を詠んだ句も、句集に採られている。

秋早き母の忌日や天の川

（「ホトトギス」大正一三年一一月号入選）

これは、「秋早き」と「天の川」と季重なりであるが、「虫干や家に傳はる贋蕪村」「揚げ舟に追われる汐や盆の月」の二句とともに、「ホトトギス」雑詠に入選した句でもある。「父の忌」の句を入れたのであるから、バランスをとるためにも「母の忌」の句を入れておかないといけないと誓子は思ったのであろうか。

このほかに、選句に特徴が出ているものに、神戸の地名が織り込まれた俳句がある。

秋晴れや街の中なる生田川

（「ホトトギス」昭和四年一月号入選）

しかし、同じ神戸の地名を詠んだ句で、誓子が選んだのは次の句である。

街中の生田の森の新樹かな　（昭和四年成）

生田という神戸の地名を詠んでいるが、「秋晴れ」と「新樹」で秋と夏で季節が違うため、比較は難しいかもしれないが、

誓子が選んだ「街中の生田の森」は生田神社の森のことである。啼魚の妻の実家は、この生田神社の近くにあり、その父は氏子総代であった（注3）。そのため、同じ街の中にあるものとの対比として、生田川よりも生田神社とするほうが、聖と俗との対比も明確になり、また、啼魚の遺族にも配慮した誓子の選句に軍配を上げたい。

次に、誓子の選句において特徴的なものは、昭和六年、大阪毎日新聞と東京日日新聞が募集した「日本新名勝俳句」に啼魚の句が四句も選ばれているのに、そのうちの二句しか採ってないのである。「日本新名勝俳句」は、英彦山「弥して山ほとゝぎすほしいまゝ」の杉田久女や箕面瀧「瀧の上に水現れて落ちにけり」の後藤夜半の句が帝国風景院賞という大賞になったことで有名であり、大賞のほかに地名毎に優秀句一句（金杯賞）と佳作五句（銀杯賞）が選ばれる賞である。啼魚の句は、以下のように入選している。

鳥羽灣
漕ぎ寄るははしりがねかも夜光蟲　（昭和六年成）
［金杯賞］

木曽川
住慣れて河鹿聞く岩定まれり　（未詳）
［銀杯賞］

宍道湖
水の面にかゞやき消えし小鳥かな　（未詳）
［銀杯賞］

姥捨
大雪の中に動ける水車かな　（大正一二年成）
［銀杯賞］

右記の句のうち、「漕ぎ寄るは」と「大雪の中に」の句を誓子は『啼魚句集』に入れ、「住慣れて」と「水の面」の句は採られていないため、いつ詠まれたかは未詳なのである。このように、名誉ある賞を取った句を誓子は外しているのである。「寛選」は、「鑑識眼」の高い啼魚の意図するところではないということであるが、それにしても厳選である。

「漕ぎ寄るは」の句は、金杯賞を受賞した一句であり、「はしりがね」という鳥羽などの伊勢の海辺にいる漁師や風待ちの船乗りを相手にした遊女を表す言葉をうまく詠み込み、夜光虫との妖しくも物悲しい光との調和により、誓子

も句集に入れたと考えられる。

さらに、「大雪の中に動ける水車かな」の句は分かりやすく、秀逸であろう。姥捨の白い雪野の中に、ゆったりと回る黒々とした水車。色の対比と水車の回る音まで聞こえてきそうな、視覚と聴覚にひびく俳句である。だからこそ誓子も句集に入れたのであろうか。「住慣れて」や「水の面」は木曽川や宍道湖でなくても、その土地独自のものを示すことはないためであろうか、誓子は採っていないのである。

以上は、高濱虚子は選んでいるが、誓子が句集に入れなかった俳句である。厳選と言えば厳選であるが、選に関しても妥協するところがない誓子がうかがえる。しかし、啼魚にとっては思い出深く好きな俳句と考えられる俳句についても、誓子は、虚子の選に関係なく、句集に入れているのも事実である。

それは、大阪海上火災保険の社長であった浅井啼魚が、関東大震災（大正一二年）の損害保険の支払いをめぐり、地震時の火災は免責条項であるが、被害を受けた多くの人を救済したい政府の全額支払いという考えと対立し、啼魚は毅然と会社を退職した。この時の餞別の返礼として、啼魚は、二百個もの菓子鉢に句と画を揮毫したのである。神戸大学には、そのうちの三種類の菓子鉢が所蔵されている。

大阪のおとかすかなり虫の聲　　月と薄の画
（「ホトトギス」大正一二年一二月号初出）

釣りやめて立てば船虫なかりけり　澪標の画
（「ホトトギス」大正一三年一〇月号初出）

岸を行く夜振の人の仲間かな　　魚籠の画
（大正一三年成）

［表記は菓子鉢の記載のままである］

十三（じゅうそう）にあった吉向十三軒という窯元で、素焼きの茶碗に句と画を自ら描いた菓子鉢であり、二〇〇個もの菓子鉢なので、俳句の種類はもっと多かったと思われるが、現存するのは右記の三句が描かれた菓子鉢である。どの句も大阪の街や趣味であったと思われる釣りを詠んだ「ホトトギス」主宰の高濱虚子の「花鳥諷詠」に即した、素朴な味わいのある俳句と言えよう。確かに入集しても当然と思われる俳句であり、誓子も啼魚への敬意とともに、句集に採ったのだと思われる。

また、神戸大学は、啼魚の四幅の箱入りの軸も所蔵する

が、その軸に書かれた俳句も誓子は、全て句集に入れている。

瀬田遠き湖の流れも春なれや　井口東白子画
（昭和四年成）
大ものは源五郎なり灯取蟲　（大正一四年成）
風呂敷を解けば高鳴く囮かな　井口東白子画
（大正一四年成）
住吉の末社のうらの冬田かな
（「ホトトギス」昭和二年四月号初出）

箱の裏に「昭和五年孟夏、啼魚題」と書かれた春夏秋冬の軸であり、どれも啼魚独特の男らしい骨太の書であり、しかも「瀬田遠き」と「風呂敷」の軸には、わざわざ俳画家でもある井口東白子に画を描いてもらっているのである。何かの記念のために書かれたものであろうか。これらは、戦災にも遭わず今に伝えられた四幅揃いの軸である。ここに書かれた俳句のうち「住吉の」句は、「ホトトギス」の虚子の選に入ったものであるが、あとの三句は、虚子の選には入っていない。しかし、箱入りの軸は、おそらく啼魚が特別に書いた条幅であり、自信作であり、好きな句であると断言してもいいかと思われる。また、どの句も、啼魚の何気ない日常の風景を男らしく堂々と詠んだ句であり、誓子もそこを評価し、偶然なのかもしれないが、採っているのである。

そして、最後に、前章で、誓子は柩の中にトランプを入れたということを述べたが、おそらく、トランプを入れるきっかけとなった句が次の句であると思われる。

炬燵たぬし親子が中の賭事も
（「ホトトギス」昭和一二年九月号初出）

これも「ホトトギス」昭和一二年九月号の雑詠に入選した句であり、当時の出版事情から考えると、七月に投句されたものと推測できる。ということは、八月に亡くなった啼魚の遺詠と言ってもいい句であり、二重の意味を持つ句である。「たぬし」は「たのしい」ということであり、家族が炬燵を囲み、「賭事」は誓子が柩にトランプを入れたことから、ブリッジなどのトランプ遊びを家族で楽しむ光景であると考えられる。欧米へ出張旅行をしている啼魚であ

るから、「賭事」も日本の花札ではなく、スマートな西洋のトランプであると想像される。家族との縁が薄かった誓子にとっては、浅井家の人々は誓子の実の家族と同様であり、家族が集まって遊びをするということは、誓子の味わったことのない楽しみであったであろう。浅井家では、点を競ったり、勝ち負けも真剣であったのであろうが、しかし、そこは家族ならではの楽しさがあっただろう。

以上のように、「ホトトギス」雑詠に入選した俳句の中で、遺句集に入れた俳句と入れなかった俳句を比較し、誓子の選句の一端を見た。入選した九一句のうち、五六句を句集にとっているが、六〇％であり、結論的には、前述のように、いい句は誰が見てもいい俳句と言っていいのかもしれないが、「ホトトギス」初入選の句や「日本新名勝俳句」に入選した句を外しているのは、やはり厳しい選と言えるかもしれない。また、もし誓子が「ホトトギス」を辞めないでいたら、こんな潔い選句はできなかったであろうと思われる。虚子の「ホトトギス」雑詠に入選した句はすべて入集させたであろうし、『啼魚句集』という浅井啼魚という人柄が凝縮された句集は生まれなかったであろう。さらに、春夏秋冬の揃いの軸や退職記念に作った菓子鉢に書いた俳句に関して、ほかに揃いの軸や菓子鉢の句も三句以外のものが見つかれば、偶然なのかあるいはそうでないのか、誓子の厳選ぶりが証明できるのであるが、現時点では確信が持てないのが残念である。ただ、啼魚が自信を持ち好んだと思われる俳句は、やはりいい句であると判断でき、すべて採られていると考えるのが妥当であろう。

## おわりに

本稿で取り上げた「死の随筆」では、啼魚を亡くしたという悲しみとともに、冷静に客観的に人の死を眺める誓子がいることが分かった。ただ、浅井啼魚の死について後世に残そうという気持ちは、啼魚への敬愛と言えるであろう。また、『啼魚句集』の編集は、誓子自身は会社員としての仕事と病魔の接近に危惧しながらであるが、「ホトトギス」を辞め、新しい独自の俳句を求めた誓子の情に捉われることのない、いい俳句は採り、そうでない俳句は採らないという選句の一端をうかがい知ることができた。これは、戦後、昭和二三年一月に「天狼」を創刊し後進を指導する立場となり、さらに朝日俳壇の選者となった誓子の選句の仕方の研究の一助になるのではないかと考える。

注

（1）「死の随筆」の初出は、「文藝」（昭和一二年一一月号）であり、その後、『夜月集』（第一書房、昭和一四年）に少し手を加えられた状態で掲載され、さらに、今では差別用語なっている言葉が省かれ、『山口誓子全集　第九巻』に収められている。本稿では、啼魚の死に際しての誓子の心情を推し量るために、初出の「文藝」の「死の随筆」をもとにした。

（2）誓子は「出会い」（朝日新聞、昭和四一年四月二四日付）という随筆において、高濱虚子、佐々木惣一、川田順を「三人の父」と呼んでいる。高濱虚子は、「ホトトギス」の主宰で、誓子が昭和一〇年「ホトトギス」を辞めたときも、温かいまなざしで見ていた人であり、佐々木惣一は、誓子の第三高等学校時代一時寄宿した京大の教授である。大学への学費も援助してもらっていた。

（3）「昔のこと」（「むすび」生田神社、報、昭和四三年一月一日）に、誓子は、啼魚の妻の父は、末永清という人で「生田神社の氏子総代になつてゐた」と記している。